

結党目的分からぬ「八策」

記述ほとんどない「都構想」

混合診療の完全解禁や軽症患者の自己負担増などを掲げる日本維新の会（代表・橋下徹大阪市長）が15日、国会活動をスタートさせた。支持率が急落し、批判してきた既存政党との連携を図るなかで、同会はどこに向かおうとしているのか。地方財政の専門家でも、橋下「改革」の実態を検証してきた森裕之氏（立命館大学教授）に投稿してもらった。



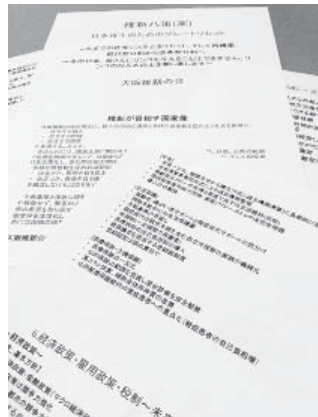
基軸

日本維新の会
①
ねらいと実態

立命館大学教授 森裕之

「大阪都構想が実現すれば解散する」として

た橋下・維新の会が、国政進出のために日本維新



8月末に公表した「維新八策」最終案。「大阪都構想」に関する記述はほとんどない

の会を結成した。8月末にまとめられた「維新八策」をみても、橋下・維新の会の単一争点であったはずの「大阪都構想」は統治機構改革の中で触れられているだけで、まったく重要視されていない。「維新八策」の大部分は「大阪都構想」とは何の関係もなく、この地

域政党はいったい何を目的にして結成されたのかさえわからない。

180度変質

これまで大阪の政治を劇場的に振り回してきた橋下・維新の会は、それ

までの主張をたえず変えてきた。橋下氏が知事のときには、大阪府を解消して「関西州」を実現し、大阪市をはじめとする市町村にはこれまで以上の行政能力を発揮してもらうというビジョンを掲げていた。それが突如として、「大阪都（＝大阪市や堺市、さらには周辺市までもを廃止する）」という方針へ180度変質する。その間に大

阪の統治機構改革についての十分な検証を行った形跡もなく、以前の言説はまるで無かったかのよう

に政治が動かされている。知らない、「大きな嘘は人々の心に必ず強い印象を残す。嘘だったといふことよりも、この残された強い痕跡の方が余程大事である」というヒットラ

ーの思想を描いている。目標である道州制が実現すれば、他の府県に統合される「大阪都」も消えてなくなるが、彼らは「まず大阪都をつくった

後の関西州へ移行するので、時間の流れからは矛盾しない」といった稚拙な主張をする。

「維新八策」は大阪の取り組みを全国に広げることがを柱としている。我われ一人ひとりが憲法に定められた主権者として自覚的に声を発することがいま何よりも大切な

嘘で印象残す

かつて小林秀雄は「ヒットラーと悪魔」という

(つづく)

評論の中で、「大衆が、信じられぬほどの健忘症であることを忘れてはな

もり・ひろゆき 1967年大阪府生まれ。高知大学専任講師や大阪教育大学助教授を経て、2003年から立命館大学政策科学部助教授。09年から同教授。地方財政と公共事業を専攻。著書に『検証・地域主権改革と地方財政』『大阪維新改革を問う』（いずれも共著）など多数。